

25の講義内容 言語生活からみた新聞記事・雑誌

「クリスマス」

十二月も最後の時間を迎えるこの季節柄、「クリスマス」の片仮名の大字が「ペプシ」の宣伝に描かれていた。日本では「Xmas」と「chisumas」などと表記され始めて久しい時間が流れてきた。このうち、ドイツ・ポーランドは「chisumas」派。

安倍なつみさんが「クリスマスの日：恋人がサンタクロース、本当はサンタクロース：雪の待ちから来る」って歌っていたが、この歌詞がテレビのテロップで流れていた。

また、あるスーパーの入りにくには、クリスマスツリーの樅の木に、願い事を書き記したカードが「七夕」の短冊さながら幾枚もつり下げられていたりする。

「クリスマス」の記事

「クリスマス」の記事を新聞及び雑誌に見ていくことにしよう。

☆元宝塚月組トップスター、真琴つばさ(43)が19日、都内で**クリスマスディナーショー2007**「Princess Panther」を開催した。

着用する6着のドレスとジュエリーは総額1億2000万円で、なんと警備員が「護衛」。「ワァー！私は1億円の女なんだわ」と驚嘆していた。

☆**クリスマス**が近づく東京の街を、光と花で彩るイベント「光都東京・LIGHTOPIA 2007」(光都東京実行委員会主催)が二〇日から、東京都千代田区の手町、丸の内一帯で始まった。

☆オーストリア・スロバキア国境の会場には「国境なしに**メリークリスマス**」と大書された幕が掲げられ、両国政府首脳ら約三〇〇人が「自由往来時代」の実現を歓迎した。オーストリアのグーゼンバウアー首相は「拡大は犯罪と不安定さでなく、平和と安定を意味する」と力説、スロバキアのフィツオ首相は「歴史的な日だ。スロバキアはEU全体の境界の警戒に責任を果たしたい」と語った。

《ことばのコラム》 ◇シェンゲン協定

国境や空港での旅券審査をなくし、加盟国間を自由に移動できるようにする協定。当初の五カ国に、スペインとポルトガルが加わった九五年に発効。順次、加盟国が増え、現加盟国数は一五カ国。EUに加盟する二七カ国のうち英国、アイルランド、ルーマニア、ブルガリア、キプロスは協定に参加していない。スイスとリヒテンシュタインは来年一月に協定に加盟する見通し。

☆ローマ法王ベネディクト十六世が最近、**クリスマス**の商業化を批判した、と海外の通信社が伝えている。一昨年も「現代の消費社会では、歳末のこの時期になると**クリスマス**の真の精神を脅かす、商業主義の汚染にさらされている」と訴えた。

☆**クリスマスプレゼント**の日本国内での経済効果は1兆円を超える(第一生命経済研究所)という。米国はもつとすごく、二十二、二十三両日だけで小売売上高が一五〇億ドル(約一兆七〇〇〇億円)を上回ると推計され、その増減が他国の景気をも左右する。

☆世界経済に組み込まれた歯車の回転を止めることはもはや難しいが、ゆがみも小さくない。それを示す問題が米国で起きた。ある上院議員が「人権団体の調査によると、**クリスマスツリー**の飾りなどの多くは中国製で、十二歳の子どもを含む労働者に対する搾取と人権侵害が行われている」と指摘し、「商品は店頭から排除すべきだ」と訴えたのだ。

☆前ローマ法王のヨハネ・パウロ2世も晩年、商業主義による変質を嘆き、**クリスマス**本来の意味を

改めて説いて、次のように語った。

「貧しい人々、困っている者に思いをいたし、連帯する機会をもち、祈ろう」

クリスマスを迎える時、せめて、そのくらいの想像力は持ちたいと思う。

☆**Xマスツリー**：ムード満点 岩出に登場、シクラメンも見ごろに / 和歌山

岩出市東坂本の県植物公園緑花センターの温室に、クリスマスツリー（高さ約3メートル）が登場。シクラメンも見ごろを迎え、**クリスマスムード**を演出している。

ヒノキ科のゴールドクレストに、職員がモールなどで飾り付け。ポインセチアや洋ランの鉢で根本を華やかに彩り、先端には星の形のデコレーションを付けた。

シクラメンはクリスマスを彩る花として人気。赤や黄、ピンクなど色とりどりの約一五〇鉢が並び、ほのかに甘い香りが漂う。見ごろは今月末まで。

☆**Xマス会**：青豊高生、手作りで 恵光園の障害者と交流―豊前 / 福岡

豊前市荒堀の知的障害児・者総合施設「恵光園」で一九日、県立青豊高校の生徒三〇人によるボランティアの**クリスマス会**があり、吹奏楽の演奏や寸劇を通じて利用者約一三〇人と交流を深めた。

青豊高に統合前の旧築上東高は、八一年から〇五年三月の閉校まで同園と交流。青豊高では生徒がそれぞれ「マイボランティア運動」に取り組んでおり、閉校によってつながりが途絶えていた園とクリスマス会を開くことを自主的に発案した。

会では吹奏楽部（松吉玲奈部長）の二一人が**クリスマスソング**を演奏し、利用者たちの拍手を浴びた。家庭クラブ（磯田梨津湖部長）の九人も**クリスマス**にちなんだ寸劇を披露。プレゼントとしてクラブが作ったパウンドケーキを配った。

☆**Xマスコンサート**：ジャズやゴスペル多彩に 二三日神戸北区フラワーパーク / 兵庫

神戸市北区大沢町上大沢の市立フルーツ・フラワーパークで二三日、**クリスマスコンサート**がある。

子どもから大人までが楽しめる内容になっている。

コンサートは同パークの音楽堂である。サックスのアンサンブルが午前一時半から、ピアノとベースのデュオによるジャズが正午と午後一時四五分から、ゴスペルコーラスが午後一時から、観客も参加する**クリスマスソング**の合唱が午後二時一五分から、それぞれ行われる。

☆今日も大バテ：第12回 あえてミッキー殺しと呼ばれて

有馬記念だ。「今年も押し迫りましたなあ」は競馬人間の間では「いよいよ有馬ですな」に置き換えられる。よくぞ年末のこの時期に、この売り上げ世界一のレースを作ったという気がする。

つまり日本の競馬人間にとって有馬記念は忠臣蔵だ。一千万人の人間が全員まなじりを決して討ち入りに向かう。「ついに積年の恨み晴らすときがきた」とぬかるみの道を踏みしめる。

もちろん全員が全員、その日の朝には“南部坂雪の別れ”をやってきている。

「では内蔵助（くらのすけ）、そちはどうあっても亡き殿のご無念を晴らす気はないといいやるのか」「はは、おそれながら瑤泉院さま、内蔵助、貧乏暮らしにはほとほと愛想が尽きましてござります。

本日は他藩への仕官が決まりましたゆえ、そのご挨拶に参ったまででござります」

すべては瑤泉院の後ろに吉良方問者の腰元がいたためだ。こいつがいるために本心が言えない。内蔵助はあえて“逆臣”のそしりを受けながら瑤泉院に別れを告げ、一人南部坂の雪道に出る。

「オレが長年の負け分を今日の有馬で取り返そうとか、そんなこと考える訳がなからうが。競馬にはほとほと愛想が尽きてんだから」

「ほんとに？あんだ、ほんとに恨みを晴らす気がなくなっちゃったって言うの？そんな腰抜け男だったの？」

「ははは、かあちゃん、オレをどんなにけしかけたってだめ、オレの頭にはもう競馬のケの字もないんだから、はははははは」

高い塀を乗り越えて、赤穂浪士たちは一斉に下総中山場内に忍び込む。でもおかしい。吉良がいな

い。そこにいるのは全員が全員、早朝かあちゃんとの辛い南部坂の別れをやって出てきた赤穂浪士たちだ。

「吉良はどこだー、吉良はどこだー」

全員血のりのついた抜き身を振りながらうろついている間に、どこからか討ち入り終了の笛が鳴る。「なんで？え、なんで？もう終わり？」

「吉良なんかおるか、バーカ」

どこからか拡声器の音が聞こえる。ひよつとして400億売り上げの25%を取ってホクホクしているやつらが言ってるんじゃないのか。疑心暗鬼が浮かぶ。悔しい。

「ひよつとしてオレたち、一千万の赤穂浪士の間だけで斬り合ってたわけ？」

白たすきは血に染まり、小袖は斬り込みを受けてはだけている。浪士たちは刀を支えにようやく上半身を起こし「恨み、晴らせず」と呻く。

息絶え絶えに帰りながら除夜の鐘を聞き、赤穂浪士は涙する。でもその頃には既に呻きが「金杯こそ、金杯こそ積年の恨みを」と種類が変わっている。ええ加減に恨み忘れたらどうや、お前ら（つてお前こそ忘れる！……はい）。

*

でも最近やつと分かってきた。忠臣蔵は「あえて」の世界だ。「あえてフナ侍と呼ばれて」「あえて昼アンドンと呼ばれて」「あえて女房と離縁して」「あえて若い娘を囲って」、これが泣かせるのだ。

胸に一物持ちながら忠臣蔵の連中は泣く泣くクルワ遊びをし、泣く泣く若い娘を囲っていた。辛いんだ、これが。そんな辛さだったらオレだってやりたいよなどと言うやつは、バシッ、この分ならず屋、アレミロード産駒クラノスケの右ムチでもおクラい。

今年の有馬もはるばる東上する。討ち入りなんだから、赤穂浪士が「遠い」とか「旅費かかる」とか言う訳にはいかない。言う訳にはいかないが、でも心配なこともある。

今年の有馬は23日、イヴイヴ開催である。

去年の“デイープ引退有馬”はイヴ開催だったが、これは関西で見た。だって面白くないじゃないか、あんな1・2倍の有馬なんて。前日土曜、阪神競馬場で角居調教師に会い「有馬、行かないんですか？」と聞かれたが「行きません、行きません、だって応援する馬いないですもん」と笑いながら手を振った。夜寝るとき「あ、角居厩舎はデルタとポップ、二頭も出してるやいないか」と気づき「えらいこと言うてしもた」と起き上がったとん叩いた。

今年は混戦だ。十分行く価値がある。でもクリスマス連休の日曜開催、危険もはらんでいる。ぼくが心配なのは、帰りの京葉線舞浜駅である。あそこで事件が起こるかもしれない。赤穂浪士とミッキーマウスが取っ組み合いをする可能性があって、それを恐れているのだ。同じクリスマス連休23日の有馬を思い出す。六年前、ティエムオペラオー引退（マンハッタンカフェ勝利）の有馬記念だ。

レースが終わると、行列の後尾をじりじり進み、船橋法典駅からいつものごとく大人しく満員の京葉線に乗り込んだ。その年も皐月賞、ダービー、秋天皇賞、有馬記念とお約束の四度の東京遠征を果たし、まるでお約束のように“静かなる帰途”を実行した。「えらい」と自分をほめて、こっそりコブシで涙を拭う。

横にはいつもの同行者、競馬講師（講師を垂れる競馬好き）という意味ではない、本当に競馬講師という怪しげなナリワイをやっている）太平洋（当時二八歳）がいる。

この男、極端なオペラオー・ファンで、東京遠征のたびに「ワダー、ワダー、よっしゃ、やっぱり競馬は本命や、穴馬券なんか買うやつのがしれんわ」と傍若無人の喚きを発するものだから、「くそー、二度とお前なんかと一緒に来ん」とわざわざ東京まで同道して、つかみ合いしながら帰るといふ悲惨な遠征を繰り返してきた。

しかしこの男も落ち込んでいた。オペラオーの引退レースが5着惨敗という結果だったのだから無理のないところだ。同じ痛みはもっていても、そこは先輩だ、何か言って慰めてやらねばならない。車内の吊り広告を見上げると、海上保安庁巡視船の不審船追尾事件のことが出ている。いい言葉をおいついた。

「おい太平洋、不審船追撃の巡視船“あまみ”にはたくさんのダンコンが見えたそうや。えらい船やなあ。乗り組み員が船壁にへばりついて威嚇したたのかもしれないな。“これで撃つぞ”とかな。ダンコンから機関銃掃射だ、ババババ、ババババとかな、はっはっは」

しかし先輩の渾身ギヤグにも、講釈師は「やめて下さい、そんな下品な話」と首を振るばかりである。しらけた。先輩の優しい心遣いにそういう態度取っていいのか。

そのとき電車がデイズニーランド前・舞浜駅に着いて、ミッキーマウスの耳飾りなんか着けた大量の浮かれカップルがキャツキャ言いながら乗り込んできた。ただでさえ混んでいた車内が真正銘オシクラ饅頭状態となる。

考えてみると**クリスマスイヴイヴ**である。翌日のイヴも休日だ。楽しいデートをしたあと、こいつらにはこれから食事、ホテルなどというコースが待っているのに違いない。「二人のクリスマスに乾杯」とか言って、「わたし、今日のイヴイヴの夜は一生の記念にすることに決めてきたの、これイタリア製のキャミソール」とかって、何の脈絡もなく急激に下着姿になったりするんだ、そんなアーパー女に決まってる、きつと、くそーっ。

それにひきかえ、ああオレたちは何のためにわざわざ早起きして新幹線に乗って東京まで来たのか。あちこちから押されながら、耳飾り軍団に対して猛烈に怒りが沸き上がってくる。

ギウギウ詰めめの車内は、明るいデイズニーランド帰り軍団と、暗い有馬帰り赤穂浪士軍団で一触即発の様相となる。

ミッキーマウスの面を持っている一組のカップルが人波に押されてぼくの横にやってきた。

「わたしが鼻をここからニューツと出すでしょ、キャハハ、ねえねえ、ユウジ、これってミッキーの鼻に見える？キャハハハ」

女の持つミッキーマウスの面はどういう訳か鼻の所がくりぬいてあって、押し合いへし合いの車内なのに、女はそこから自分の鼻を出して男とジャレているのだ。いけないことだった。

「鼻やなくてダンコン出したるか」

気がついたら、望みを果たせず鬱屈していた赤穂浪士が低く呻り、すでにズボンのチャックに手を掛けていた。

「いけません、内蔵助さま」

さすが忠臣蔵もレパートリーに持つ講釈師、事態の気配を素早く悟り、内蔵助に対して渾身の諫めのセリフを吐く。

「主税(ちから)か、余は無念じゃ」

内蔵助はまだスボンのチャックに手を置いたまま、唇を噛みちぎり、血垂れの言葉を吐いた。

同じ轍は踏まない。あえて“ミッキー殺し”の汚名を着て、今年下総中山から舞浜まで席卷してくる。

*

有馬討ち入り旗印は一年楽しませてもらったダイワスカーレットだ。リードホーユーやらマヤノトップガンやら、有馬の3歳馬勝利は逃げ切り勝ちが多い。コスモやデルタは無理な争いはしないはずだ。スローペースは必定。そのまま行く可能性大だ。二〇〇七年十二月二〇日

《コラム執筆者》乗峯栄一(のりみね・えいいち) 一九五五年岡山県生まれ。文筆業。早稲田大学第一文学部卒。「小説新潮」新人賞佳作受賞。朝日新人文学賞受賞。一九九二年よりスポニチ(関西版)

で競馬予想コラム「乗峯栄一の賭け」連載中。著書「なにわ忠臣蔵伝説」（朝日新聞社）「いつかバラの花咲く馬券を」（アールズ出版等）。

◆新聞記事における「クリスマススイヴ」と「クリスマスイヴ」

日本経済新聞 http://www.nikkei.co.jp/neteyes/shimizuz2/20060528ne95s000_28.html

「ポスト小泉に七回忌・小渕恵三の呪縛「財政赤字」（2006/5/29）」

小泉は就任直後から景気対策での補正予算編成を打ち止めにし、水ぶくれした公共事業費を削減に転じさせ、「国債発行30兆円枠」も公約するなど財政規律の回復に次々と手を打った。「私の任期中は消費税率は上げない。将来の増税幅を小さくするため徹底した歳出削減を断行する」と消費税増税こそ封印したが、あのクリスマスイヴ、YKKで批判した「恒久的減税」の廃止方針を谷垣が持ち込むと、即座にうなずいた。小渕が残した宿題に小泉が手を着ける。運命の歯車は音を立てて回りだした。

（清水 真人 編集委員）<http://www.nikkei.co.jp/neteyes/profile/profshimizuz2.html>

この記事は、書き手が日本経済新聞の清水 真人編集委員ということ、はっきりとしたなかでの表記手法であることと、各新聞社の記者が記事を書くときは、「クリスマスイヴ」と表記する原則を超えたものであり、それは広告代理店等が使用する表記「クリスマスイヴ」の迎合化への一例となるまいか。

◇あえて文学作品と「クリスマス」

○「くるまを停めましょう」と魚津は言った。美那子はくるまを停めるという魚津の言葉で動悸が烈しくなるのを感じた。いつか、このようにして、小坂と二人でくるまに乗り込んだクリスマスの夜のことを思い出した。そしてその夜の自分の気持が現在の自分のそれと同じであることに気付いた。「井上靖『氷壁』九章497頁・新潮文庫」